

「豊旗雲」を再考する*

三 矢 保 永**

要 旨

万葉集中の屈指の名歌「綿津海の豊幡雲に入日さし今宵の月夜清く明りこそ（契沖訓「豊幡雲」は原文のまま）」に詠まれた「豊旗雲」について、気象学者で、初めて取り上げたのは藤原咲平であり、天気の変化の予兆となる白簧雲（しらす雲）説を唱えた。これに続く気象学者たちも、おおむねこの説を踏襲した。しかし、万葉集の研究に従事してきた国文学者たちの関心や賛同が得られたとはいえなかった。本稿では、国文学者が明示した「豊旗雲」の要件（旗が棚引くという形状的な態様、神威の発現という神性、荘厳雄大な圧倒感）、および「豊旗雲に入日さし」がもつ特別な意味を満たすこと、かつ万葉学者が「豊旗雲」と実感した観測記と同じ光景を著者が実体験したことから、豊旗雲は大空一面に群れて広がっているひつじ雲（高積雲の一種）、あるいはいわし雲（巻積雲の一種）であり、入日から放射された光芒が、その雲底で反射して雄大荘厳な夕焼けが発現した態様であるとの見解を示した。

1. はじめに

日本の古典籍に詠まれた雲を、学術上の特定の雲として、最初に取り上げた気象学者は藤原（1939）であり、その著書「雲」の巻頭において、万葉集からは次の1首を引用した。「綿津海の豊幡雲に入日さし今宵の月夜清く明りこそ」（注：この訓読みは佐佐木信綱の『新訓万葉集』（佐佐木 1927）を引用したと思われる（豊幡雲は原文のまま）。このなかで、「豊旗雲」は「白く長く長旒の翻るに似た雲」で、晴れを予兆する巻雲の「晴しらす雲」ではないかとして、その写真も例示した。例示された雲級は、巻雲のなかの火焰雲であった。雲の気象学の開拓者石丸（1952）は、日本で初めて雲の種類を図説した『風雨賦国字弁』（中西敬房 1777；以下後述の中西 進との混同を避けるためにフルネーム書きとする）から山雲、水雲、早雲、雨雲を

引用して、「低気圧範囲の各部位に於ける雲形を云い表しており、天気予報上の雲状を意味している。」とした。また、「豊旗雲」については、基本的には藤原（1939）と同様に、雲の模様から晴れが予察されていると解釈した。その後、伊藤亀雄（1968, 1970, 1975；以下後述の伊藤 博との混同を避けるためにフルネーム書きとする）は、自身が岐阜測候所および静岡地方気象台において、帯状巻雲の観測を継続し、その流れる方向と晴雨の予報との関係性（観天望気）を統計的に明らかにした。また、文徳天皇実録に記述されている「旗雲」と、帯状巻雲による観天望気がよく対応することから、「豊旗雲」が、晴れを予兆する帯状巻雲であると結論した。これまでの気象学者はいずれも、「豊旗雲」は、巻雲の一種で晴れを知らず特定の雲であり、この歌には天気予報の結果である推量が詠まれている、としてきた。

一方、国学者・国文学者の間では、この和歌は、集中の屈指の名歌とされてきたが、万葉仮名（漢字の羅列）で記された原文は、音仮名、訓仮名などが入り交じり、また、写本による文字に差異もあり、読み解き方が定まらないという難読歌でもあった。例えば、中西 進（1978）著の『万葉集全訳注原文付』（一）で

* Reconsidering the TOYOHATA-GUMO (glorious flag cloud)

** Yasunaga MITSUYA, 名古屋産業科学研究所。
〒464-0819 名古屋千種区四谷通1-13 ノア四谷ビル2F

© 2021 日本気象学会

は、「渡津海乃 豊旗雲尔 伊理比沙之 今夜乃月夜 清明己曾」。これまで国学・国文学者の間では、これをどのように読み、どのように解釈するか（訓釈）、その解釈のもとで、上の句の情景から、下の句の詠み手の心象を解釈することに主眼が置かれてきた。当然のことながら、科学的な論理思考や物理学的な観察眼が芽生えていなかった近代以前には、雲の形から特定の雲を同定することなど、微塵だに発想できることではなかった。国文学者のなかで、初めて気象学者の提案に応えたのは、素材面からの日本文学の史的な研究として雲を取り上げた吉井（1962a, b, 1963）であり、8世紀から13世紀の600年間に読まれた和歌6782首を渉猟して、雲の用例としての言語学的な起源や、用法・意味の変遷などを詳細に研究した。そのなかで「旗雲」を取り上げ、それを見たときに誘起される受容の精神作用について言及するとともに、この雲に具備されるべき態様を明示した。また、前記の石丸（1954）の著書『雲の写真と図解』を参照して、巻雲は受け入れがたいとして、より低層の夕暮層積雲ないし積雲性層積雲がふさわしいとした。さらに、雲の図像学の権威岡（1974）は、特定の雲を意味するものではなく、旗の如く細長く棚引くような形状の雲の主観的概念（一般名）であろうとした。このように、気象学者と国文学者の間には、解釈に隔たりがあり、図像的にも互いに受容できるような一致点は見いだせていなかった。

根本（1970）の「『豊旗雲論争』について」以降に、現代の万葉学の泰斗の一人である伊藤 博が、豊旗雲のイメージの具現化に有用な論文を萬葉学会誌「萬葉」に発表した（伊藤 1999）。このなかでは、豊旗雲に入日さす光景の詳細な観察記も掲載されている。この論文と、そこに記載されている観察記を読み解けば、豊旗雲の実体にふさわしい光景が浮かび上がってくる。著者は、中学3年の国語の教科書で、「豊旗雲…」の和歌を知り、以来長年にわたり山小屋や縦走路から山に懸かる雲と空の写真の撮影をしつつ、「豊旗雲」のイメージを追い求めてきた。たまたま、伊藤 博の観察記を拝読し、まさにこれと同じ光景を実体験した記憶が蘇り、また、その光景は吉井（1963）の明示した「豊旗雲」の態様を満足していると確信できるものであった。これは、気象学者と国文学者の隔たりを縮めうるものであり、これまでの論争に一石を投じる可能性があるとの思いから、本稿を起こすことにした次第である。

2. 雲、旗雲・豊旗雲

2.1 雲について

文学的表現に表れる雲の原始的な用法・意味について語るときには、8世紀から13世紀にわたる600年間に読まれた和歌6782首を渉猟して、雲の用例としての言語学的な起源と意味、およびその変遷を詳述した吉井（1962a, b, 1963）の研究は尊重されてしかるべきであろう。これによれば、我が国の伝誦的な詞章には、原始的な宗教性をもっている雲の用例があり、雲の立ち上る勢いを神秘的なもの見たり、山に立つ雲によって神の意向を伺ったりするような宗教的・呪的な意味をもっていた。また、天孫降臨の神話に見られるように、国に満ちあふれる雲気は、国土が神の靈気に包まれているということであり、雲が神格化され、また雲の棚引く態様は、神々の行動を賛美する効果をもつことにもなりえた。すなわち、古代人が雲を和歌に詠み込むことには、このような神性な意味合いが内在されていた、と考えられる。呪（まじな）いとは将来への願望であり、占いは将来を推測することであり、将来の出来事に関する当事者の主観の強さの違いはあるが、巫女や陰陽師のような専門職が、呪占の結果として、豊富な経験に基づいて雲の態様から天気予報のような託宣を発していたかもしれない。しかし、呪占のきっかけは、非日常的な出来事や特異な自然現象を観測したとき、あるいは切迫した政治的な決断に迫られるとき、と考えるほうが自然であろう。日本書紀によれば、日本最初の時計は、天智10年（671年）の水時計（漏刻）であり、日本最初の天文台は、天武3年（674年）の占星台であったとされている。これより、「豊旗雲…」が詠まれた時期には、当時の最先端の科学技術が導入されていたことを物語っている。しかし、日常的に雲観測が行われ、天気予報的な役割をもっていたとの記録はない。

2.2 「旗雲」・「豊旗雲」の態様について

「旗雲」は古代の横長の旗との類似性によって命名されたとの考えにはほぼ異論はないようである。万葉学の始祖とされる仙覚は1269年に「夕日ニ当て、雲赤色ナリ。幡ニ似タル雲也。」（佐佐木 1926a）、江戸時代の国学者契沖は1687年に「トヨ旗雲は八雲日。大ナル旗に似て赤キタの雲ナリ。」（佐佐木 1926b）、賀茂真淵は1768年に「今はかく大きならでも、西の空に長く旗の如き雲棚引るをのたまひつらん。」（統群書類従完成会 1977）と注釈した。近代以降の多くの注釈も、大同小異である。このような形状的な説明からだけでは、

いかに気象学者であろうとも、具体的な雲の種類を特定することは困難である。やはり、この和歌の前半の句に詠まれた光景を思い描き、後半の句より、それによって喚起される詠み手の心象を理解して、この和歌に最もふさわしい雲を選ぶという手順によらざるをえない。

吉井(1963)の研究によれば、「旗雲」の和歌への用例は、8世紀には、万葉集の1例があるのみで、9～11世紀までの300年間には、1例もないとのこと、また12世紀には4例、13世紀にも4例があるが、いずれも、万葉集の「豊旗雲」の模倣ないし本歌取りの歌とみられている。すなわち、この600年もの長きにわたって、「豊旗雲」を詠み込んだオリジナルな和歌は、万葉集の和歌ただ1首のみということになる。これは、「旗雲」が一般的な歌語としては定着していなかったばかりでなく、極めて特異な用例だったということを示唆している。吉井(1963)は、一般的な歌語ではなりえなかった理由として、単なる形状的な比喻だけではなく、「古代人は神が旗状に示現する態様そのものを神威の発現として、それを何かが起きる予兆と受け取るような自然観をもっていた。」と解釈していたようである。逆にいえば、「旗雲」は、神の降臨をうかがわせるような、すなわち神威を感じるほど神々しい雲の場合に限った用法であり、日常的に繰り返し現れては消えるような普通の雲に対しては、使われることはなかった、と言い換えることもできよう。

一方、漢文で書かれた史書には、『文徳天皇実録』に下記の2例があることはよく知られている。

i) 卷十天安二年六月庚子十一(ユリウス暦858年7月24日)

「庚子 早旦有白雲 自艮(うしとら) 亘坤(ひつじさる) 時人謂之旗雲」

現代語訳 早朝白雲あり。北東より南西に亘る。時の人これを旗雲という。

ii) 卷十天安二年八月丁未十九(ユリウス暦858年9月29日)

「是夜 有雲竟天 自艮(うしとら) 至坤(ひつじさる) 人謂之旗雲」

現代語訳 雲あり天に竟(つ)きる。北東より南西に至る。人これを旗雲という。

わざわざ最高権威者の天皇の実録に記載するほどであるからには、日常的には見ることがないような異常な「旗雲」が出現したということであろう。858年の天候の記録には、このほかに、iii) ユリウス歴7月12日

に「無雲而雷 遅明有星 入月魄中」, iv) 同8月3日に「遅明 濁霧濛濛 無雲而雷 大風」との記録があり、これらは「無雲而雷」のように、人為を超越した神威を感じさせるような異様な天象が見られたがゆえに、あえて記録したものと考えられる。とすれば、i), ii) に記述された「旗雲」についても、iii), iv) と異様さにおいて同列に扱ってもよいであろう。

吉井(1963)は、「旗雲」を「変わった雲」, 「異雲」などと表記しているが、「旗雲」が、単なる旗のような雲という形状的特色以外に、なにか別の特殊な意識を伴って表現されていた、との考えがあつてのことだった。この考えの展開過程は省略するが、筆者の私見となることを恐れながらも要約すれば、神話の成立過程において雲が神威の象徴であったこと、古代日本人が自然を敬い自然と融合し自然現象を崇拝するという自然観をもっていたことなどが、この特殊な意識を醸成したものと理解できる。これに基づけば、異雲がもつ特性は下記の3点に整理できる。①横に長く伸び広がる雲、②神威の発現という意識で見られる雲、③圧倒的な迫力で人に迫る態様をもつ雲。

「豊旗雲」と「旗雲」の違いについては、豊の意味にかかっている。文字通り「豊か、満ち足りている、大きい」という意味があり、語頭につけて褒め称える用法もある。また、国生み神話では、豊雲野神(とよくもののかみ)、豊玉毘売(とよたまびめ)、豊宇気毘売神(とよけびめのかみ)など、神の名称にも使われており、神性を示唆する語でもある。これまでは、「豊旗雲」は文字通りに大きい「旗雲」と解釈されてきた。しかし、その程度・規模については、あまり議論の対象にはなつてこなかった。あるいは、単なる修飾語であるとして、「旗雲」と同一視される場合もあった。しかし、神々しさを感じるほど大きくて満ち足りているならば、その規模を推測することも無意味ではあるまい。単一のあるいは少数の帯状の雲だけで、雄大荘厳で神々しいほどの雰囲気醸し出すことは考えにくい。ごくまれではあるが、多数の帯状の雲(ひつじ雲、あるいはいわし雲)が空一面に群れ広がっているという光景を目にすることがある。「豊旗雲」は、「旗雲」が全天に群れ広がっている態様であり、数条の「旗雲」が空を占めている状態とは区別するほうがよりふさわしいのではなからうか。

2.3 気象学者の見た「豊旗雲」

一方、「豊旗雲」を取り上げた気象学者たちは、和歌の詠まれた光景や心象については、関心を払うことは

なく、観天望気の観点から、晴天の予兆として現れることが多い白簀（しらす）雲（巻雲の1種）を挙げた。藤原（1939）は、『雲級図目録』第四図巻雲及巻層雲併せてしらす雲中の「火焰雲」を例示した。これを第1図に再掲する。しらす雲が前提になっているので、根拠は明示されていないが、全天に広がることもあり、夕焼けになれば美しいはずだ、という実体験に基づく選択であったのであろう。しかし、形状的には、横旗が棚引くような態様ではない点に、説得力に欠けるきらいがある。古典籍にも造詣の深い石丸（1952）は、『雲の気象学』のなかで、「豊旗雲」については、「夕刻の雲の模様から今夜の晴れを予察」と、簡単に説明しているだけであり、また320余枚の雲写真を集めた『雲の写真と図解』（石丸 1954）のなかには、「旗雲」という名の雲は入っていない。学術的な呼称ではないために、排除したものと推察される。しかし、簡単な説明からも、天気予報としてのしらす雲の考えを踏襲していたと思われる。藤原の薫陶を受けた伊藤亀雄は、勤務地である岐阜測候所や静岡地方気象台で、長年にわたり雲観測に従事し、そのなかで带状巻雲について詳細に観察した（伊藤 1968, 1970, 1975）。この雲は上層に現れる带状の巻雲で、時には巻層雲や巻積雲にも現れると説明されている。論文に掲載されている写真から判断すると、くしくも恩師藤原の雲級図目録第四図中の「帯雲」とほぼ同じであるので、カラー写真でより鮮明に分かるこちらを第2図に示す。带状巻雲の観測を続けることによって、複数の帯が収束する地平線に接する方向如何によって、その後の降雨確率と天気到大差が生じるという結果を得た。これによって、带状巻雲の方向によって、晴天・雨天の確率に違いが

生じるので、天気予報にとって有効であり、带状巻雲による予報法が、観天望気法として優れた方法である、と結論した。ここまでは、科学的な観測結果と論理的な解析に基づいており、その先見性と努力は評価を受けるに値する。しかし、带状巻雲を「豊旗雲」と断定する過程には、国文学者の解釈とは相容れない点をいくつか見いだすことができる。

- 1) 「带状巻雲は、決して珍しい雲でもなければ、異常な雲でもない」これは、吉井（1963）の「旗雲」の要件とは真つ向対立する特性である。
- 2) このような日常的に現れる雲に対して、神威の発現を感じられるか、圧倒的な迫力で人に迫る態様をもつ雲か、と問われれば、見慣れた光景ということであれば、やはり否であろう。
- 3) 長年にわたり観測されたということであり、写真もそれなりに撮影されていると思われるが、圧倒的な迫力で人に迫る態様の写真が一枚も示されていない。
- 4) 引用されている文徳天皇実録の「旗雲」に関する記述は、雲の方向を示しているだけであり、その後には晴天になったのか・雨天になったのか、なにかの予兆を知るために呪占的な行為が行われたのか、などについては、なにも記述されていない。雲観察を行っていたことの証左にはなりえても、天気予報に使われていたと結論するのは早計であろう。「旗雲」が記録された期日は、ユリウス暦に換算すれば、7月24日と9月29日で、前者は梅雨前線の活動期、後者は秋雨前線の活動期であり、異雲の出現が豪雨の前兆（凶兆）になりえた可能性も否定できない。伊藤亀雄の雲の観測地は、岐阜測候所と静岡地方気



第1図 火焰雲。『雲 増訂版』（藤原 1939）の第四図版巻雲及巻層雲併せてしらす雲に掲載されている雷しらすの中火焰雲。



第2図 帯雲。『雲 増訂版』（藤原 1939）の第四図版巻雲及巻層雲併せてしらす雲に掲載されている雨しらすの中帯雲。

象台で、解析に使用されたデータは、後者で5年間に及ぶ記録である。すなわち太平洋岸気候の中心地であった。一方、「豊旗雲」が詠まれた時期は、斉明天皇7年正月（ユリウス歴661年2月11あるいは12日）、場所は、播磨国印南国原（いなみくにはら、現在の兵庫県加古川市・明石市あたり）の津に停泊中、という解釈が通説となっている（伊藤 1999, 2005；小野 2000）。すなわち、厳冬期でしかも瀬戸内海式気候の中心地であった。また、『文徳天皇実録』の「旗雲」の記録は、前記したように7月24日と9月29日で、現在の気候から類推すれば、前者は梅雨前線の活動期、後者は秋雨前線の活動期であった可能性もある。「豊旗雲」が詠まれた厳冬期や、「旗雲」が記録された梅雨前線・秋雨前線の活動期は、観天望気による予報が最も苦手とする時期であることにも留意しておく必要がある。その上、観天望気には地域的な差異が大きく、関東地方の観測データの解析が、瀬戸内式気候にもそのまま適用できるのか、議論が必要になる。

3. 「入日さし」には特別な意味がある

1999年に現代の万葉学の泰斗の一人である伊藤 博は、「豊旗雲」のイメージの具現化に有用な論文を万葉学会誌「萬葉」に発表した。それは、「豊旗雲に入日さし…」の「入日さし」には、特別な意味があるというものである。「万葉集に関する多数の論がありながらも、これまでにこの『入日さし』についての実態がなんであるのか、について問うた人が一人もいない。」ということで、新発見といってもよいであろう。万葉集のなかから、「入日刺」、「入日成」が詠まれた3首を選び、入日の情景を解釈すると、「入日が山や雲に入り隠れてさす日」を示すという共通点があることが示された。

「入日」がこのような特別な意味をもつことの証左に

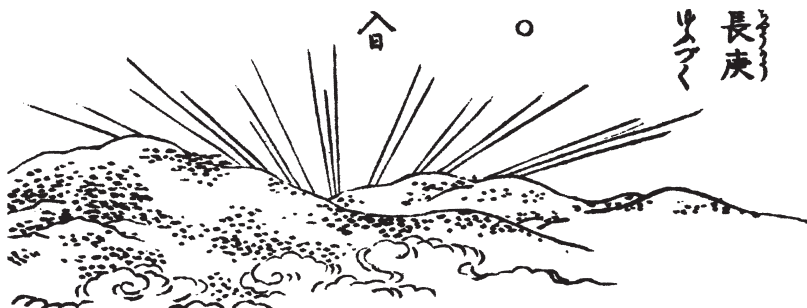
なるイメージを探索中に、江戸時代に出版された百科事典形式の『頭書増補訓蒙図彙』(二) (中村 1695)、および『頭書増補訓蒙図彙大成』(二) (中村 1789) に行き着いた。後者のなかに「入日」の図版があり、入日の光景が、伊藤 (1999) の情景描写と寸違わないことを目にして驚嘆した。それは、第3図に示すように、まさに太陽が山に隠れて、隠れた太陽から光芒が放射状に放たれているものだった。また、日出の説明図にも、同様の光芒が描かれていた。さらに驚くべきは、第4図に示すように上弦・下弦の説明図では、太陽が隠れてはいない下弦の場合には、「日出」を用いているが、太陽が隠れてはいない上弦の場合には、「入日」を用いていることである。すなわち太陽が隠れている場合には「入日」、隠れていない場合には「入日」と使い分けている。一方「日出」にはこのような使い分けはない。なお、第4図の初出は、『頭書増補訓蒙図彙』(二) (中村 1695) である。「豊旗雲」が詠まれた時期から、千年も経過した江戸時代においても、「入日」が、万葉時代と同じ意味をもっていたことには、驚きを禁じ得ない。日本が周囲を海に囲まれ、異文化の流入が限定的であったことの一つの証左にもなる。なお、万葉集研究において、『頭書増補訓蒙図彙大成』(二) (中村 1789) を参照したのは、本稿が初めてのことと思われる。

伊藤 (1999, 2003) の指摘は、「豊旗雲」のイメージ化には重要であるので、以下に再掲しておく。「『入日』は、入り隠れつつあり、また入り隠れてしまっている範囲をさすもので、『さす』は、太陽光が烈しく厳しく、対象を刺して放射することをいうと見てよい。それは、太陽光の神秘・荘厳を言い表す靈威の語であったと考えられる。」この情景描写は、まさに山影あるいは雲影から上空に向かって放射された黄金色の光芒

が、全天に広がる「旗雲」の雲底に差し込み、そこで反射して雄大で神々しいほど見事な夕焼けが出現している光景と重なる。

4. 「豊旗雲」はこのような雲

伊藤 博の論文「豊旗雲に入日さし」(伊藤 1999) のなかに、本人がまぎれもなく「豊旗雲に入日さし」の光景に



第3図 『頭書増補訓蒙図彙大成』(二) (中村 1789)、卷之一天文に掲載されている「入日」の図解。

相違ないと実感したときの観察記録が詳述されている。日野市程久保太郎山の山頂近くにある自宅からは、連日のように夕焼けが観察できたとのことであるが、1999年7月14日6時30分から15分間にわたって繰り広げられた夕焼けは格別なものであった。観察記録の核心的な部分を再掲すると、「入日の始まり。(中略)日は雲山に入り込んでしまった。その途端、雲山の稜線一面にまっ赤な光の線が奔った。山頂に延々と電光の躍るがごとし。(中略)雲山にはあちこち薄い所があるらしく、入日は雲山の上に薄くとびとびにたなびく雲に、そしてまた雲山の南や北のあちこちに浮き立つ白雲にさし込んで、それらの雲々を赤く黄色く染めて浮き出した。一面茜。全面の黒雲の山に対比して、そこには途方もなく明るい広い夕焼けの別世界が深々と出現した。そして雲山の向こうに姿を隠した入日は、上方の薄雲に向かって、往時日本の海軍旗そのままの光線を、数条、放射し続けるのであった。」

筆者はこの情景描写を読んだときに、これと全く同じような光景が眼前に展開され、その圧倒的な荘厳さに感嘆しつつ、連続写真に撮影していたことを思い出した。撮影日は、2009年10月21日、撮影地は八ヶ岳連峰の権現岳頂上(2715m)。この日は、一日中ほぼ快晴。しかし、夕焼けが迫ってくるころから、棚引いた雲が、幾条にもほぼ並行に並んで、西空一面を覆い始めた。西南方向に見える御嶽より遙かに高い中層の雲で、ロール状に塊を形成し、雲底に影ができることから、典型的な高積雲(ひつじ雲)である。高積雲には透光性がないため、太陽が雲上にあるときは、空は

重々しい黒灰色で覆われていて、美しい夕焼けは望むべくもなかった。第5図の写真は、太陽の最後の一光がさし込み、入日状態になる直前の一瞬である。夕日が沈まんとする山は、中央アルプス北端の大棚入山(2375m)、右側に写っている高山は、御嶽山(3063m)である。この写真から、細長く棚引いた雲が、ほぼ平行に雲底をそろえて幾条にも広がり(ひつじ雲の大群の襲来とでもいえようか)、昼間の快晴から一転して雄大な空模様に変貌したことが分かる。入日状態になると異変が起き始めた。第5図にもすでにその片鱗が写っているが、第6図に示すようにこの群れて広がっている雲の太陽に面した西端に稲妻が奔ったような黄金色の光線が現れた。日が沈むにしたがってそれまで黒灰色だった雲底にも、薄い茜色の光が届き始めて、次第次第にその範囲を広げるとともに赤みが強くなり、数分も経つと、雲底全体が茜色の別珍生地のように染まり始めた。第7図の写真は、雄大荘厳さが、クライマックスに達した頃に撮影したものである。群れて棚引いているそれぞれの高積雲の一つひとつの雲底あたりが、幾筋条もの黄金色の太い糸の刺繍で線引きされ、あたかも絢爛豪華な緞帳のように変貌した。高積雲群の西縁は、あいかわらず黄金色に輝き、日入りした山稜の直上あたりには、欄間彫刻に見られる渦巻き状の黄金色の雲が斑になって現れ、その間隔に対応して、放射状の幾条もの光芒が放たれていた。

この筆者の観察記は、前述した伊藤 博自身が自宅から観察した「豊旗雲に入日さし」の観察記と比較するとほぼ一致するといってもよい。また、齋藤茂吉をして、「壮麗と言うべき大きい自然と、それに参入した作者の気魄と相融合して読者に迫ってくるのであるが、如是壯大雄嚴の歌詞というものは、遂に後代には後を絶った。」(齋藤 1938)といわしめた情景と重ねることができる。

すなわち、現代の万葉集研究の泰斗、あるいは近代の万葉調の歌人の巨匠が思い描いていた「豊旗雲」とは、旗のように棚引いた幾条ものひつじ雲の大群が、大空を埋めるが如く広がっていて、山の稜線に沈んだ太陽から幾条もの光芒が放射され、それが高さの揃った雲底全面で反射して、大空を覆うばかりの雄大荘嚴な夕焼けを出現させた高積雲であったといってもよいのではないだろうか。

少し補足すれば、伊藤 博の観察記では、雲に透光性があり、少しばかり薄いように感じられる説明箇所もある。このため、ひつじ雲よりも上方にできるいわ



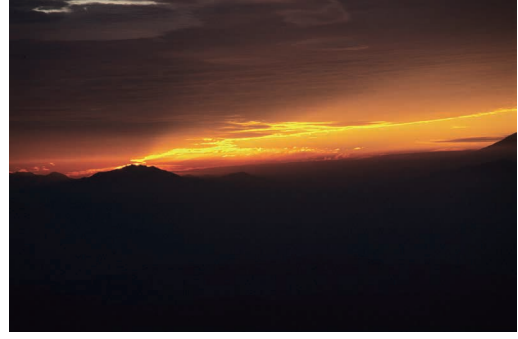
第4図 『頭書増補訓蒙図彙大成』(二)(中村 1789)、卷之一天文に掲載されている上弦・下弦の図解

し雲の大群の可能性も否定できない。しかし、遠い分だけ圧倒感や威圧感が少なくなるであろう。吉井(1963)は、石丸(1954)の『雲の写真と図解』を参照して、ふさわしいと思われる雲として、带状巻雲を排除して、夕暮層積雲を選択した。これはたまたま夕焼

けが写っているカラー写真が2枚しかなく、他よりもましな程度のやむを得ない選択だったといわざるをえない。層積雲では、高度が低すぎることで、雲底の凹凸が大きいため、入日によって雲底で一様に反射する雄大荘厳な夕焼けが見られるとは思われない。



第5図 「入日」直前の光景。西空はひつじ雲の大群に覆われ、太陽の上端が大棚入山(2375m)に沈みつつ、最後の一光を放っている。右の高山は御嶽山(3063m)。著者撮影。



第6図 「入日」直後の光景。ひつじ雲の大群の西端に稲妻が奔ったような黄金色の光線が現れた。著者撮影。



第7図 「入日」した山稜から放射状の光芒がさしこみ、ひつじ雲の大群の雲底で反射して雄大荘厳な夕焼けが出現した。著者撮影。

5. まとめ

新元号が万葉集に由来する「令和」に改まって、にわかに関心が高まり、万葉集本が売り切れになるという社会現象が生じたのは、ほんの1、2年前で、いまや「令和」にもなじんできたようである。万葉集(4516首)には、雲、風、雨、雪、露、霧、霞、霜、霰など多くの天象・気象を詠んだ歌があり、なかでも雲という用語が用いられている歌は200首にも達する。このように考えると、万葉仮名という日本語で書かれた万葉集は、日本人が固有にもっている自然観や宗教観を探求する原点であるとともに、日本の気象学の原点に位置付けることもできる。気象学者で、初めて万葉集の「豊旗雲」を取り上げたのは藤原(1939)であり、天気の変化の予兆となる巻雲(白簀雲)説を唱えた。これに続く気象学者たちも、おおむねこの説を踏襲した。しかし、万葉集の研究に従事してきた国文学者たちの関心や賛同が得られたとはいえなかった。本稿では、国文学者が明示した「豊旗雲」の要件(旗が棚引くという形状的な態様、神威の発現という神性、荘厳雄大な圧倒感)、および「豊旗雲に入日さし」がもつ特別な意味を満たすこと、かつ万葉学者が「豊旗雲」と実感した観測記と同じ光景を著者が実体験したことから、「豊旗雲」は大空一面に群れて広がっているひつじ雲(高積雲の一種)、あるいはいわし雲(巻積雲の一種)であり、入日から放射された光芒が、その雲底で反射して雄大荘厳な夕焼けが発現した態様であるとの見解を示した。気象学者・国文学者の間の橋渡しの一助になれば幸いである。なお、この実体験の翌日も一日中快晴であった。はからずも、「夕焼けの翌日は晴れ」との観天望気のことわざをも実証することにもなった。

最後に、本稿の執筆のきっかけを与えていただいた株式会社ZENIS 嶋田かをり社長に謝意を表します。また、本稿掲載にあたっては、古典籍に現れる旧字体の表記法について、学会誌としての規定、文化の伝承、著作権などの観点から、貴重なコメントいただきました。編集委員会各位のご努力に深く謝意を表します。

参 考 文 献

藤原咲平, 1939: 雲 増訂版 [雲 増訂版]. 岩波書店, 102pp.
石丸雄吉, 1952: 雲の気象学 [雲の氣象學]. 北隆館, 159pp.
石丸雄吉, 1954: 雲の写真と図解 [雲の寫眞と圖解], 北隆

館, 251pp.

- 伊藤 博, 1999: 豊旗雲に入日さし. 萬葉, (171), 1-20.
伊藤 博, 2003: 万葉歌林 [萬葉歌林]. 塙書房, 7-34.
伊藤 博, 2005: 万葉集積注(一) [萬葉集釋注(一)]. 集英社, 82-87.
伊藤亀雄, 1968: 豊旗雲の正体. 天気, 15, 116.
伊藤亀雄, 1970: 新宮殿の壁画と豊旗雲論争. 天気, 17, 36-38.
伊藤亀雄, 1975: 考証豊旗雲. 天気, 22, 297-302.
中西 進, 1978: 万葉集全訳注原文付(一). 講談社, 55.
中西敬房, 1777: 風雨賦国字弁 [風雨賦国字辯]. 華文軒, 乾編40pp, 坤編55pp.
中村惲斎, 1695: 頭書増補訓蒙図彙(二) [頭書増補訓蒙圖彙(二)] 卷之一天文. 山形屋, 5. 国立国会図書館デジタルコレクション(4/25コマ).
中村惲斎, 1789: 頭書増補訓蒙図彙大成(二) [頭書増補訓蒙圖彙大成(二)] 卷之一天文. 皇都書肆九皇堂, 7および12.
根元順吉, 1970: 「豊旗雲論争」について. 天気, 17, 38-39.
岡 順次, 1974: 旗雲一雲の古典一. 測候時報, 41, 265-268.
小野 寛, 2000: 万葉の月. 高岡市万葉歴史館論集3「天象の万葉集」, 107.
齋藤茂吉, 1938: 万葉秀歌上巻 [萬葉秀歌上巻]. 岩波書店, 18-23.
佐佐木信綱, 1927: 新訓万葉集上巻 [新訓萬葉集上巻]. 岩波書店, 21.
佐佐木信綱 編, 1926a: 仙覚全集(万葉集叢書第八輯) [仙覚全集(萬葉集叢書第八輯)], 古今書院, 26. 国立国会図書館デジタルコレクション(29/238コマ).
佐佐木信綱 編, 1926b: 万葉代匠記巻一 [萬葉代匠記巻一]. 契沖全集第一巻(上田萬年 監). 朝日新聞社, 1020pp. 国立国会図書館デジタルコレクション(150/532コマ).
吉井 巖, 1962a: 雲(一)一素材面からの日本文学の史的研究一. 大阪経大論集, 35, 108-131.
吉井 巖, 1962b: 雲(二)一素材面からの日本文学の史的研究一. 大阪経大論集, 36, 150-169.
吉井 巖, 1963: 雲(三)一素材面からの日本文学の史的研究一. 大阪経大論集, 40, 55-80.
続群書類従完成会 編, 1977: 賀茂真淵全集第一巻万葉集巻一之考. 続群書類従完成会, 42.

【編集委員会注】

本稿では、編集上の都合により、旧字体(いわゆる康熙字典体)を新字体(通用字体)で表している部分があります。